

幼児と音楽



芝 恭 子

常日ごろ幼児の生活に表われる音楽的な行動を見て、いよいよその感を深くする事柄があります。それは、彼らが何と音楽する人であるかということです。私たち大人が、どうやって子どもに音楽を身につけさせようかと考える先に、子どもたちは彼ら自身、既に音楽する人なのであります。私がここで言う音楽する人とは、日常生活の真つただ中で、自発的に、生命全部をかけて歌い、動き、鳴らし聴く幼児の姿のことです。恐らく彼ら自身、そうした行為を特に意識してはいないでしょう。それほど自然に、夢中に歌い、動き、鳴らし、聴く幼児の姿のことです。

子どもが話し言葉のリズムに即興のメロディー（それは二度から四度くらい単純な音程であるにしても）をのせて語り、あるいは歌うのを聞かない母親がいるのでしょうか。あんなに遊び興じ

ているわらべうた、一体いつ保育者は子どもたちを一場に集め、こと改めて教えたでしょう。公の乗物で、夏のさ中にジングルベル、木枯しにでんでん虫を口ずさむのは黙認されたとして、声張上げてテレビのお気に入りテーマソングを歌う子どもを母親が制する光景は、私の記憶でも二度や三度ではありません。例を歌にのみとどめますが、子どものこうした姿を見ると、それは音楽する「心」というより、もっと切迫して激しく、また間違いない喜びや楽しさに満ちた、いわば生命が命ずる「欲求」とでも表現したいものを感じます。「音楽活動とは本来人間にとって、外側から添加されたものを内側に消化して行くことではなく、個人の内面に既に潜在している欲求とも言えるものが、機を得てさまざまな形で外へ溢れ出る類の活動である」と言う、人間と音楽のつ

なかりに対する私の基本的考えが、人生のスタートラインをたつて間もない幼児たちに支えられて余りあると思わざるを得ません。

一方、音楽活動を日常性から離し、芸術として探究する人の姿も、言うまでもなく音楽する人です。より優れた演奏ができるために技術を磨き、より深く聴くために知識を探ることを惜しまぬ人々は、まぎれもなく音楽する人です。歌唱や器楽のフォーマルなレッスンに励む子どもも、その子が自分でそれをしようと思つてやっているなら、やはり音楽する人です。私は試みに、前者を「欲求のレベル」後者を「精進のレベル」の音楽活動と呼んでいきます。そして、このどちらも音楽する人の真実の姿であり、どちらが欠けても、人間は十分な音楽的成長ができないと考えるのです。以上、私が音楽に対してどんな理念を持っているかを記しました。これからは、今日の幼児と音楽の実態を、私の限られた見聞の範囲で、この理念に照らして論じることいたします。

私は幼児と音楽の関係で演じる大人たちの役目を見る時、そこにある傾向を感じざるを得ません。大人、それも子どもを愛しはぐくむ親や保育者たちは、子どもに音楽させることには非常に熱心で、子どもが音楽すること、あるいは自分でもうで、できることには気がつきにくい。一方自分に対してはどうかと言うと、すべて技

術的能力の有無程度で音楽への態度を決め、技術があればその面の進歩が、子どもを音楽させる時余計気にかかる。技術なしと認める者は、やはり子どもにはさせながら、自分では精進の努力に時やエネルギーをさくことは怠っている。と、こういう傾向です。人間の音楽生活は、まず「欲求のレベル」から開始され、そこで心ゆくまで満たされた結果、当然、きたるべきもの移行行く方向として「精進のレベル」が出番となるのですから、幼児期は大人がやっきになる必要なし。

私たちが幼児の音楽的成長のために助けになりたいと真に願うなら、音楽（そのほとんどは音楽そのものでなく、音楽に関する何物かである）を振りかざして子どもの前に立ちはだからないこととしましょう。その代り、私たちもせいぜいくつらいで、自分の得手や興味に従い音楽生活を楽しむのです。音楽で自分自身を楽しませることなしに、どうして子どもに音楽させようとむきになれるのか、不思議でなりません。繰り返しますが、子どもは既に、生命の内側からほとぼり出る欲求で音楽しています。その表現の形は、あるものは彼ら自身が生み出し、そして多くは、彼らが自発的に生活環境から吸収したものです。大人が幼児の音楽的成長を助ける方法にとって必要なヒントは、これただ一つと言っても差しつかえないでしょう。そうです。大人が子どものため

に魅力的な音楽的環境になること以上に、効果的かつ望ましい方はありません。私たちが子どもに虎視眈眈たまたんとすることを止め、自分を楽しませることが、実は大きな助けを彼らに送っているのだという、逆説的な真実を私は唱えているわけです。

そこでこの魅力的な音楽環境のことを、紙面の都合上歌に例を絞って、もう少し述べてみましょう。今日子どもの生活環境には、おびただしい種類と数の歌が交差しています。この中から子どもは何を選び取るか。幼稚園で習った歌もあるでしょうが、テレビが仲立ちする流行歌、テーマソング、CMソングが広く座を占めているのは確かです。これに対して多くの心あると自覚する大人たちはまゆをひそめ、マスコミの無責任さを憤慨する。そして一方ではそれらの歌が子どもにアピールする要素を持つことを認め、これに對抗し得る子どもの歌の出現を作曲者に要請します。こうした反応は至極もつともなことでしょう。しかし私には思えてなりません。問題は作品でなく、歌の伝え手にあるのではないかと。

今私たちが受けついでいる音楽的遺産の中には、子どもに愛唱されるに価する子どもの歌が、既にかなり多くあると私は考えます。それらの作品が五線紙に預けられているかぎり、幾万冊楽譜が積まれていようと、子どもにとってはゼロと同じことです。ま

た真に歌の生命を伝えるよい歌い手を得なければ、子どもは選び取らないでしょう。作品に対する子どもの直感的選択力と、子どもにアピールする作品の傾向を考える必要性を無視しているのはありません。が現在私自身が「幼児と音楽」で最も欠けていると感じているのは、日常性の中にある大人の音楽する姿、歌にすれば魅力的な歌い手であるということを強調したいのです。

誤解を招く表現かもしれないことのために覚えながら、私はあえて申します。大人、特に保育者は、歌を教えることをやめましょう。子どもに音楽させることなど忘れてしまひましょう。保育に歌を持ち込む時、私たちは自分の心を先生から演奏者に切り替えるのです。保育の現実では母親たちのように、自分自身で楽しむことがそう簡単にすつきりできませぬ。それは各々の私生活の中にゆだね、保育の中で歌う時には、子どもを教え導く人から、子どもに自分の音楽する姿を見せる人に変わろうということです。子どもがその歌を覚えたかどうかを案ずる必要もありません。教えられて頭は明確に覚えても心は楽しまない歌が、いわゆる「校門を出す」になるのです。

そして、保育者が選んで幼児の歌を歌うのは、保育の外にある音楽から子どもを守るためであってはならないと思います。ましてそれらに對抗して勝つためであつてもなりません。ここに私た

ちの力みや押しつけがまさしが潜んでいて、歌唱を聴かせる本質的な意味―聴き手に歌の生命を伝える―を殺してしまいます。敏感な幼児の耳にこの歌は決して楽しく響きません。保育者は幼児にとって、ただ一人の歌い手であるはずも、またある必要もないと思います。しかし、他の歌い手が伝えることのできない、その子のために選び抜かれた歌を歌えるただ一人の人になることはできません。更に、ただこの一事を淡々としかも高い水準で成し得る時、保育者は幼児にとって最も魅力ある歌い手となることができます。

歌い手にとって、自分を慕い信頼する聴衆を得るとは何と幸いなことでしょう。私自身この聴衆ゆえに、愛唱してやまないあの歌この歌を、よりすぐって伝えたいと思います。この聴衆ゆえに、もっとよく歌えるようになりたいと精進します。自分の歌唱能力を気にしている暇はありません。魅力的な「環境」になるには楽しむ心が不可欠ですが、技術を磨く厳しさが同道して、初めて一人前の歌い手になれるのだと私は考えています。こうしてみると、保育者にとっては教えている方が遙かに安易であるかも知れません。音楽に限らず大人は、自分自身努力や行動する姿を子どもに見せないで、言葉の指図で子どもにさせることの方が多い。その方がずっと安易だから。しかしこれは子どもにとって真

の説得力はありません。なお念のため添えますが、子どもを聴衆にしてというのは、セッティングも演奏会場のようにして歌えというのではなく、あくまで内面の構えを意味します。今ここでその歌がほしい時、子どもに正面の顔を向け親しく心をかかわして歌うのです。

残る紙面で伴奏のことを。伴奏はまず置いておく。歌唱は大きさに言えば、砂漠や水の原野でも生命があればできる。歌を歌うとはそんなにも根源的な音楽活動なのだということをふまえて下さい。そのうえで効果的な伴奏を得ればよし。ただしもう明治以来のピアノ至上主義は卒業してほしい。弦管打と揃った今日の歌の持ち味に従って自由に起用を試みる創造的好奇心ももっとあっていいはずですよ。

幼児が私たちの音楽する姿を自分のものになりたいと思った瞬間、私たちの歌は五線紙を離れ、彼らの心に預けられ歌いつがれます。やがて、このままでは獲得したくてもできない音楽に出会う。その時こそ彼らは誰に強いられることもなく、自発的に「精進のレベル」に入り、困難を克服しながらより深い音楽の楽しさを知り、成長し続けていくのです。

(東洋英和女学院短期大学)